



Title	<紹介> 斎藤理生・杲由美編 『新聞小説を考える－昭和戦前・戦中期を中心に』
Author(s)	服部, 峰大
Citation	語文. 2022, 118, p. 75-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

斎藤理生・泉由美編

『新聞小説を考える―昭和戦前・戦中期を中心に』

服部 峰 大

本書は一九三〇年代から一九四〇年代の新聞小説を中心に様々な考察を行い、新聞、時代、作者、読者、挿絵、記事などが関わり合う新聞小説という場を明らかにする。本書は二〇一六年から二〇一九年にかけて不定期開催された共同研究会の成果を一冊にまとめたものである。本書では複数の論文とコラムによって新聞小説に様々な角度から考察を加える。初めに論文の概要を示す。

平浩一「文学史と山本有三の位置―文学ジャンルならびに一九三〇年代の受容から」では、一九三〇年代を中心に山本有三の新聞小説作家としての一面に注目することで、多彩な活動を残しながらも文学史から排除されてきた山本有三の「独特」さが如何に形成され、その「独特」さを山本有三自身がどのように扱ったのかを明らかにする。

泉由美「白井喬二「藤三行状記」論―地方新聞における展開」は、「藤三行状記」（昭和八年五月四日〜同年十二月三十一日『福岡日日新聞』、その他三紙）の可能性を考察する。本論では、全国紙と異なる地方紙という場が持っていた可能性を明らかにすると共に、これまでの主人公像を相対化する新しい主人公像、挿絵や演劇化に触れることで本作再評価の可能性を示した。

後藤隆基「獅子文六「悦ちゃん」論―一九三〇年代における〈少女歌手〉の歌／声」は、獅子文六の初の新聞連載小説作品で代表作でもある「悦ちゃん」（一九三六年七月一日〜一九三七年一月十五日『報知新聞』）の持つ問題意識を明らかにする。本作は、時代の流行に乗りながらも大人が求める「少女」という問題意識を前景化しており、この問題意識は後の時代においても機能し得た。

松本和也「岸田國士「暖流」を読む―複数のプロット／戦時下の身体」では、「暖流」（一九三八年四月一日〜一九三八年九月一日『東京／大阪朝日新聞』）が、新聞という幅広い読者層を意識することで純文学的な芸術性を持った通俗小説という社会性を持つ新しい新聞小説を生み出し、同時にこの試みが後に岸田が唱えた地方文化論の萌芽となっていたことを明らかにする。

斎藤理生「高見順「東橋新誌」論―「東京新聞」を手がかりに」は、激動の時代に描かれた『東橋新誌』（一九四三年一〇月三〇日〜一九四四年四月六日『東京新聞』）が、他紙面の同時代トピックスや高見の他紙の紙面を盛り込みつつ、語り手「私」を通じて虚構を現実の側に引き寄せることで、戦時下の東京を異化し読者に味合わせる作品であったことを明らかにし、戦時下の文学者の在り方を考察する。

次に〈コラム〉の概要を示す。

後藤隆基「〈コラム〉新聞小説と演劇」では、『大阪朝日新聞』と成駒屋、『大阪毎日新聞』と松嶋屋という二つの新聞と劇団の関

係から、明治期の大阪における新聞小説と演劇の結びつきを考察する。

果由美「コラム」挿絵のゆくえ」は、単行本化される際に切り捨てられることの多い新聞小説の挿絵について、一九三〇年代に発刊された挿絵付き単行本を紹介しながら論じる。

さらに本書には斎藤理生による「新聞小説主要研究文献リスト」が付属している。このリストは、単行本、単行本の一部に新聞小説論を含むもの、雑誌特集、研究論文とジャンルごとに新聞小説に関する主要文献を紹介している。

ここまで示したように、本書は単行本化や時代の流れに伴い忘れられがちな新聞小説を巡る場を様々な角度から明らかにする。このような試みは新聞小説が「生きた」姿を描き出す。本書が示したように新聞小説研究は未だ掘りつくせぬ鉱脈そして魅力を持っている。そういった意味では、巻末に示された主要研究文献リストは親切であると共に非常に重要な意味を持つだろう。新聞小説だけでなく小説を巡る場に興味を持つ人にとって本書は必読の一冊といえる。

（パブリック・ブレイン、二〇二〇年三月、一一八頁、一、〇〇〇円＋税）

（はっとり・たかひろ 本学大学院博士後期課程）